地域、家庭の「学校愛」引き出す

第27回時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践⑤

●横浜市立白幡小学校

横浜市中心部に近い住宅街にある横浜市立白幡（しらはた）小学校（永池啓子校長、児童数614人）。地域、家庭とのつながりが薄い都市型の学校の問題に直面していたが、学校側から「地域」「家庭」に明確な役割を求める大胆な手法で、子どもを取り巻く大人たちの潜在的な関心、愛情、責任感を自然な形で引き出すことに成功した。都市化に伴い孤立気味だった学校は、数年で地域社会との距離を縮め、保護者が積極的に行事に参加する生き生きとした交流の場に生まれ変わった。

見えない距離

白幡小の校長に着任した5年前、永池校長は、学校、地域、家庭との間に、目に見えない距離があるように感じたという。地域や家庭はそれぞれが十分にしっかりと充実しているのに、相互の関係性が希薄に思えた。そこで、永池校長は『「地域、家庭にとっての学校』とは何か、根本的なところから見詰め直そう」と考えた末、学校、家庭、地域が協働し、同じレベルの深い愛情を持って子どもを見守り、学力、人間力を根付かせることだと確信した。

ある日、永池校長は教員たちの前で、提案をすることになる。

「学校だけが問題を抱え込み、頑張っても空回りする。地域にも家庭にもやってもらわなければならないことがある。堂々と甘えましょう。信頼して任せましょう。子どもの明るい声が鳴り響けば、家庭も地域社会も活性化していきます」

この方針に基づき、白幡小改革が始まった。

まずは、当時のPTA幹部らと一緒に、教育に関心を持つ、熱意ある地域人材の掘り起こしを始め、少しずつつなげていった。ネットワークは次第に広がり、2009年「学校地域支援本部『白幡小いちょうの会』」の発足につながった。

「分かるまで」補習

「いちょうの会」は、卒業生や地域の人たちがボランティアの講師となり、子どもたちの確かな学力の定着に向けた補習などを行う組織。地域が関与する、学校改革の大きな基軸となった。

開かれて4年目になる「土曜塾」では、学力の中心となる国語、算数の基礎学習「読み書き算」教室を開始。子どもたちの関心を高める「なかよし英語」「おもしろ科学体験塾」なども年間30回程度開催している。中でも、読み書き算には、学習塾に通う生徒も多い中、学校の約2割の子どもが参加。子ども3～4人に1人のボランティア講師が付き、個別指導を行う。講師は、白幡小の卒業生や保護者、地域の人たちで、学校の取り組みと連携して学力の補充を担当している。

子どもは、自分が理解できるまで細やかに支援され、「分かる」「できる」という経験を重ねることで、自信を持った。学習面の充実は、学校施設の環境面の充実に向けた支援「花壇花植え隊」「天然芝グリーンキーパー」などの活動にも結び付いた。この活動には保護者や老人会なども積極的に参加。「母校をオアシスに」を合言葉に、天然芝の校庭が、多くの地域の人たちが集う交流の場になった。

白幡小では保護者が協力し、人間国宝で歌舞伎俳優の中村吉右衛門さんを招いて、子どもが「一流」「本物」と生身で向かい合う貴重な授業も行った。

「普段、触れる機会のない一流の歌舞伎俳優を目にして、子どもたちは人生には、勉強以外にも多くの道が用意されていることに気付いた。今後の人生で幾つもの挫折が繰り返されても『やり直しの利く自分』でいられることを学んだはず」（永池校長）と手応えを口にする。

卒業式には一人ずつスピーチをするが、その内容にも変化が表れた。以前は「野球選手になりたい」などと言うだけの内容が、最近では、「みんなに勇気を与えるような野球選手になりたい」と、自分の活躍にとどまらず、その向こうにある人たちの存在までも意識した内容に変わってきたという。

「土曜塾」でボランティアの学生から個別に補習を受ける子ども（白幡小提供）

保護者の登場

こうして、内から外から活性化した白幡小では、取り組み5年目となる現在、学力向上にも手応えが感じられるまでになった。2011年度の横浜市学力学習状況調査では、白幡小の学力は全学年で5％以上、市平均を上回った。特に2年生算数の「数学的考え方」で30％、2年生国語の「書くこと・構成」領域では15・5％も上回った。地域による学校支援は予想以上に成果を上げていった。

学外では地域の祭りに子どもが積極的に参加するようになるなど、地域社会もにぎわってきた。

店舗が焼ける火事が起きた時には、自分の家のことのように心配する子どもたちの姿があった。地域の人たちが、登下校の子どもに温かい声を掛ける光景も多くなった。子どもの変化が地域社会にも明るさを与え始めた。

しかし、何よりも学校関係者を驚かせたのが、保護者が学校現場に足を運ぶ頻度が目に見えて増えたことだ。

学校の玄関に生けている花が枯れそうになったら、保護者が新しい花に替えてくれる。学習支援、花植え、読み聞かせ（くるみの会・図書ボランティア）などに関わってくれる保護者は、児童数600人あまりの学校にもかかわらず、200人に達した。

「学校のことを手伝ってあげたら予想以上に喜ばれた」「学校に行けば、子どもの元気な姿も間近で見ることができて、自分も元気をもらえた」「先生1人が40人を相手にしているなんて知らなかった――」保護者からさまざまな感想が聞かれたのも収穫だった。ある保護者は「私たちでは全部はできないけれど、できる部分もある。それをぜひ、教えてください」と申し出てきた。

永池校長は「任せられた地域、家庭の中に、やりがいや自信、学校現場に携われる純粋なうれしさが芽生えていったのが分かった。同時に、地域や保護者にとっては、学校が想像以上に敷居の高い場所になっていたことが分かってはっとした」と言う。「学校を訪れた保護者から『私たちも学校の中でこんなにやれることがあるんですね』などと言われると、『まだ、アピールが足りないなあ』と反省させられる」と話す。

地域や家庭に「信頼しています。任せます」と言うことで、相互の信頼関係が太くなった。それは学校だけが悪戦苦闘し、教員が疲れ果てるといった今日的な教育の課題の解消にも寄与している。

白幡小が繰り返し地域や家庭に言ったことは、「あなたたちの子どもが通っている、あなたたちの学校なんですよ」というシンプルなことだ。しかし、それは、保護者には潜在的に自分の子ども、他人の子どもを問わず愛する心があって、本心では学校に積極的に関わりたいと思っているという、忘れがちになっていた当たり前のことを改めて気付かせてくれた。自分たちが、学校で「ここまでできる」というやりがいを地域、家庭が持ったことも大きかった。

永池校長は「学校が何でもやりますではなく、できないことを積極的に発信した。正直に『助けてください』と言ったから、多くの人たちが手を差し伸べてくれた。これからは、学校が一段下りて、協力を呼び掛けることが大切ではないか。自分でも気付かないうちに、学校という存在が敷居の高いものになっていないか、改めて検証し、考えることが重要」と話す。白幡小のモットーは「学校できっかけ、家庭で定着、地域で活用」。地域の人々や学校で愛され、下校時には商店街の人から温かい言葉を掛けてもらう。家では親に愛される。白幡小の目指す理想の成育環境が整いつつある。

（長橋伸知＝横浜総局）